

## ある小規模な錯乱の分析

——skype通話について

仲山ひふみ

人に誘われるまま、設定に手こずりながら僕にとって初のskype通話を試みた、あの夜の奇妙な体験。それがきっかけだった。

僕はその日までskypeというものを文字によるコミュニケーションだけを目的として使用してきた。音声通話機能や映像送信の機能があることは知っていたが、全く使っていなかった。カメラやマイクなどの周辺機器を接続して、通話のためのこまごまとした設定をするのが億劫だったからというものもあるが、何より普通にしても通話を必要とする機会が全くなかったのだ。そんな僕がなぜ、通話に手を出したのかと言えば、大方の予想通り、異性がその理由だった。

陳腐すぎて自分でもあきれてしまうのだが、事実には変わりない。僕がその女性と知り合ったのはある現代美術系のイベントでのことであった。二人とも美大に在籍しているということで、共通の話題に

は事欠かず、その後双方から誘い合わせて何回かデートに行った。特におかしなこともなく、僕たちは自然とskypeのアカウントを教えあう仲となって、毎晩のようにキーボードに向かい合って画面上での他愛も無いコミュニケーションに興じた。しかし、彼女はイラストを能くし、僕とskypeするときはペインタブを前にしての作業中であることが常だった。当然、skypeで文字を打って送信するためには、ペインタブで作業する手を一旦止めなければならない。その中断が煩わしらしく、彼女は僕に音声通話ではできないのかと訊ねてきたわけだ。音声通話でなら作業の手を止めることなく会話を継続することが可能であるという、至極合理的な考えである。

このような経緯で、僕はskypeの通話機能を初めて使うこととなった。僕はそれ以前まで、skype通話はせいぜい電話の代替物で、料金を節約するためのもの程度にしか思っていなかった。なので、通話自体が持つ官能的な側面には比較的無自覚なままそれを使い始めた。僕はその時点では、skype通話を持ちかけられることが、どのような性的ニュアンスを含んでいるのか理解していなかったのだ。したがって、冒頭でskype通話の利用が異性に触発されたものであったことをありふれた切っ掛けとして描いたが、それは実際にこの機能がどのような性質を持っているかを身をもって確かめた後だからこそ、事後的に述べられることだったのだ。そして、いまや僕はskypeの通話機能が現代インターネット文化において無視できないポルノグラフィカルなアーキテクチャとして機能していることを認めている。

続きは、PROJECT : AMNIS VOL.1 本誌にてお楽しみください。